

# 革の聖地で「エコ」なめし

## 現場探

床面に並ぶ槽の深さは3  
尺。植物由来のタンニンで  
満たし、牛の原皮を上下に  
揺らしながら1カ月以上浸  
すと、硬く扱いにくかった  
「皮」が、強さとしなやか  
さを兼ね備えた「革」へと  
生まれ変わる。生産活動に  
環境への配慮が求められる

なか、老舗皮革メーカーが  
一見古風な「原点回帰」の  
生産を模索している。  
国内で流通する成牛革の  
7割を生産し、「革の聖地」  
とされる兵庫県。特に生産  
が盛んなのが南西部の姫路  
市とたつの市だ。揖保川や  
市川などの水資源を背景に

国内の事業者の3分の2が  
集まり、その技術を発展さ  
せてきた。中でも創業11  
年の「山陽」（姫路市）  
はサッカーコート5面分の  
広大な工場を構え、靴や家  
具、自動車の内装まで幅広  
いもの作りを支えている。  
肝となるのが「なめし」



植物由来のタンニンに1カ月以上浸し、硬い皮を柔らかくしていく。森山有紗撮影

の技術だ。腐敗の原因とな  
るたんばく質や脂肪を植物  
成分や薬品などで取り除  
き、繊維をほぐして柔らか  
い質感を与える工程で、同  
社は2006年から自然薬  
材を使ったなめしを本格化  
させた。

創業時から一時途絶えて  
いた「タンニンなめし」と、  
特産の塩と菜種油を使う、  
伝統の「白なめし」を土台  
にした方法だ。いずれも出  
荷まで半年程度かかる一方  
で、化学薬品を用いる方法  
と比べ環境負荷が格段に少  
ない。戸田健一社長は、革  
づくりを「行き場を失った  
皮を活用できる循環型の産  
業」と位置づけ「将来的に  
は全体の半数まで割合を引  
き上げたい」と話す。地域  
にサステナビリティ（持  
続可能性）を根付かせ、生  
産体制を世界基準に近づけ



注文ごとに染色や質感の仕上げをした革（兵庫県姫路市）

るためだ。

現在、売上げの8割を  
占める「クロムなめし」は、  
最も普及する製法で生産性  
が高い一方、化学薬品を使  
う。薬剤が有害物質に変化  
し、洗浄の過程で排水に混  
入する可能性があり、環境  
面で課題を抱える。古くか  
ら皮革文化が根付く欧米で  
は近年、環境問題や動物愛  
護の観点から「レザーフリ  
ー（皮革の不使用）」の逆  
風が吹いている。こうした  
消費動向に因應するため、高  
級ブランドや自動車メーカ  
ーの間では、環境保全に厳  
しい基準を課す認証制度  
「LWG（レザーワーキン  
ググループ）」の取得が相  
次ぐ。同社も23年度の取得  
を目指し、国際基準の事業  
者への脱皮を図る。

地元の振興にも目を配  
る。2年の準備期間を経て、  
革小物の自社ブランドを立  
ち上げた。国内有数の革の  
産地という、同県の意外な  
側面を消費者に発信するの  
が狙いだ。戸田社長は「バ  
ッグや財布になった革を手  
に取ってもらい、伝統ある  
産業を知ってもらいたい。  
いずれは世界遺産・姫路城  
に続く観光資源に」と意気  
込んでいる。（森山有紗）

テレビ大阪・やさしいニ  
ュースでも紹介します。